第三講　法学部　学問論・弁証法

次の文を読んで、あとの問いに答えよ。

学者の変説改論は、学者の無節操を意味するものだといってよく非難される。ところが偉大な学者の遺作を年代順に読んでゆくと、かなり大きな問題についてしばしば大きな変説改論が行われているにもかかわらず、そこに何らの非難すべきものをも感じない場合が多い。著者自ら変説について何らの言訳も言っていないにもかかわらず、変説の過程が極めて合理的に理解できる場合が非常に多い。なまじ自説を固持するために、自らも無理とは知りつつ無理を押し通そうとする学者よりも、何のこだわりもなく、その際自分の感じ、また信ずるところを朗らかに述べている学者のほうに、より多く好感の持てる場合が決して少なくない。無論、いかにも不愉快だと思われる変説改論を見出すこともしばしばある。しかしそれは、根本に確固たる信念を持たずに、四囲を見まわして絶えず時流を追うような――実は学者らしからざる――学者についてのみ見出し得ることであって、真に学者らしい学者は、学者としての進歩につれて、時に大きな転回を行うにもかかわらず、我々はそこに何らの不自然をも発見し得ない。かえって、大きく転回すればするほど、その人の偉大さを感ぜしめる。偉大な学者ほど偉大な転回を遂げつつ、しかも我々に、何らの不自然をも感ぜしめない。そういう偉大な学者の全生涯を通じて行われた思想的転回の跡をたずねて、そこに一貫した合理性を見出すことは、偉大な学者の思想的生涯をその実践としての著作を通して研究する我々にとって、無上の喜びを与えるものである。

法学者としてのイェーリングの名を知る人々は、恐らくは、多く彼を自由法学の先駆者として知っているに違いない。ところが彼の法学者生活は、先ず「概念と論理構成とを何よりも大事なものと思う」所謂概念法学的傾向から始まっているのであって、彼が自由法学的傾向に転向したのは、ようやく四十四、五歳の頃である。その急角度的転向を、彼は一八六五年四月十八日、多年の論敵であったヴィントシャイトに与えた書簡の中で、極めて直截（ちょくせつ）に告白している。即ち、それまで「概念と論理的構成とを何よりも大事なものと思っていた」イェーリングは、今や「真理に通ずる最後の道は、形式的技術の辺に存するにあらずして、これを通り抜けた彼岸に存する」という大悟に徹底して実際生活の要求に背反する法律的論理が出てくるはずがないとい

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

うようなことを、多年の論敵であるヴィントシャイトにむかって大胆にも告白し得る境地にまで発展しているのである。Bその朗らかな態度にはいささかの不自然もない。我々はただ、この言葉の前に頭が下がるだけである。ところが面白いことは、この手紙で「形式法学的の要素の権威をあまりに蔑視し過ぎていた」と批評されているヴィントシャイトが、その後かえって反対に、段々と形式法学的傾向を強くして、終にはドイツ私法学の聖書とまで言われるような大著『パンデクテン法教科書』を書ける学者にまで転化したことである。

　この二人の偉大なる法学者は、互いに論争しつつ、終には陣営を交換して互いに相対立するようなハ交互的転回を遂げたのであるが、こうした現象を、我々は果たしていかに説明すればいいのであろうか。この二人の態度は、一見いかにも不思議に感ぜられるけれども、よくよく考えてみると、むしろ非常に自然である。一体、法学における概念法学的傾向と自由法学的傾向とは、それ自身正反対なものであるにもかかわらず、そのいずれもが法学にとって欠くべからざる要素であって、この偉大な法学者は、論争のうちにこの二つの傾向を実践的に体現したのである。従って二人の論争対立が激しければ激しいほど、それから我々は法学の真面目を感得し得るのであって、彼らは互いに反対の動きを示して学者的全生涯を以て、C法学の真面目を我々に示し教えているのである。

　一体、人間の思想的進歩は、決して［D］的に行われるものではない。我々の心の中には、テーゼ（命題）とアンチテーゼ（反命題）との闘争が行われている。その闘争の結果ジンテーゼ（総合命題）が生まれた瞬間には、それがまたただちにテーゼとなって新しいアンチテーゼを生み、そうしてそれらの闘争が絶えず行われるのであって、それでこそ思想の進歩が可能なのである。そうしてこの闘争のあらわれとしての［E］は、ある一生を通じた大きな波として現れ、またあるいは瞬間的なニ微妙な波動としても現れるのであるが、その波長は、学者が偉大であればあるほど、またその学者が読書と思索とのうちに努力する度合が大きければ大きいほど、大きく現れるのであって、イェーリングとヴィントシャイトとの論争とその間に行われた交互的転回とは、実にこの二人の学者の偉大さを如実に表明するものにほかならないのである。

　我々の小さい体験だけから考えても、我々の心は常にテーゼとアンチテーゼとの闘争で充たされている。そうしてその闘争の波長は、我々がより多く読書し、より多く思索し、またより多く書き、もしくは言う場合に、最も大きくなることを感ずるのである。講義もしくは講演をした経験のある人々は誰しも感ずることと思うが、我々が聴衆にむかって或ることを言った瞬間に、

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

我々の脳裡に――それまで全く思いも及ばなかった――今言ったこととは全く正反対な考えが、突如として浮び出すものである。[F]そうしてそのことは、講義ないし講演の準備が最もよくできている場合に、最も力強く実現するのである。また文筆に従事する人々は、必ずや、或ることを書いた瞬間にその今書いたばかりのことが反対物になって、瞬間後の己と対立するという事実を体験されるに違いないと思う。無論、この動揺対立の程度は、人によっていろいろ違うらしい。所謂遅筆と言われる人は、まだ書かないうちから心の中で激しい自己闘争を行っているに違いない。書いては消し、書いては原稿用紙を破りながら、熱烈な心理的闘争をやっているに違いない。そうして、不断の闘争を締切期限のために人為的に打ち切られていやいや原稿を手離すのが、文筆に従事する人々多数の経験であると思う。真面目に思索する人々は、恐らく締切期限がないならば永久に原稿を手離さないだろう。ああも考えこうも考え、ああも書きこうも書きつつ、永久に思索を続けるに違いないと私は考えている。

しかし同時に私は、同じ理由から、大きく進歩しようと志す学者は、己自らを絶えずテーゼに固定するように努力すべきだと思う。偉大な思索能力を持つ学者は、言わずともまた書かずとも、己の心の中にテーゼを固定せしめつつ、ただちにアンチテーゼを生んで両者の闘争裡にジンテーゼを生むことができるかも知れないけれども、普通の学者にとっては、現在思っていることを言葉なり文章なりに体現して、それを完全なる外物に固定した上で、それをテーゼとしてただちにそれと心中のアンチテーゼとを闘争せしめたほうが、より容易に進歩を遂げ得るのではなかろうか。私にはどうもそう思われてならないのである。

凡庸な我々は、心の中だけでテーゼとアンチテーゼとを明瞭に対立せしめる能力を充分持っていない。ところが、ひとたび考えを言葉なり文字の上に体現すると、それがただちに己を離れた外物になる。そうしてそれが己を批判もするし、己がまたそれを批判する。かくして[ホ]相互的批判がただちにジンテーゼを生み出しつつ、そのジンテーゼが更にただちにテーゼとなって、新しいアンチテーゼを生み出す。そうしてその[G]テーゼとアンチテーゼとの闘争を克服せんとする努力こそ、学者を進歩せしめるものだと思う。

（末弘厳太郎（すえひろいずたろう）『嘘の効用』より）

問１　傍線Ａにいう「真に学者らしい学者」のありように合致する語句として最も適当なものを傍線イ～ホから一つ選び、符号で答えよ。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問2　傍線B「その朗らかな態度にはいささかの不自然もない」のはなぜか。その理由として最も適当なものを次のル～ヨから一つ選び、符号で答えよ。

ル　イェーリングが、概念法学からいさぎよく自由法学に改論した態度は、正々堂々としていたから。
ヲ　イェーリングが、四十四、五歳の時期になって学説を転回したのは、学者の全生涯における発展として自然だったから。
ワ　イェーリングが、相手の批判を受けて概念法学から自由法学に変説したのは、学問上の論争の当然の帰結だったから。
カ　イェーリングが、概念法学を捨てて自由法学へ転向したのは、法学の発展として合理的だったから。
ヨ　イェーリングが、偉大な先輩学者に率直に旧説の誤りを告白して学説を転化したのは、好感がもてるから。

問3　傍線C「法学の真面目」の説明として最も適当なものを次のタ～ネから一つ選び、符号で答えよ。

タ　法理論を形成するに当たって、論争しつつも陣営を交換し、互いの意見を十分に聴きあって理解を高めようと努力するということ。
レ　法理論を形成することの中に、常に現実における実践を導入し、反映させることを努め怠らないということ。
ソ　法理論が実践の中で否応なしに変化することを自覚し、かつその際助けとなった相手に対して敬意を払うということ。
ツ　法理論の発展は、単純に積み上げられることによってではなく、論争に由来する曲折を経て実現されるということ。
ネ　法理論においては整合性が重要であり、そのために探求は概念法学的傾向と自由法学的傾向のどちらかに決着するということ。

問4　空欄DとEに入る語句の組み合わせとして最も適当なものを次のナ～ヰから一つ選び、符号で答えよ。

ナ　D　概念　　E　体験
ラ　D　瞬間　　E　遅延
ム　D　直線　　E　動揺
ウ　D　心理　　E　実践
ヰ　D　一方　　E　交換

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問５　傍線Ｆ「そうしてそのことは、講義ないし講演の準備が最もよくできている場合に、最も力強く実現する」のはなぜか。その理由として最も適当なものを次のノ～マから一つ選び、符号で答えよ。

ノ　準備ができていると、考えていることが言葉あるいは文章として外在化され、対象化されやすくなるから。

オ　準備ができていると、聴衆によく理解され、質問や反論がそれだけたくさん出てくるから。

ク　準備ができていると、自分の主張の中の未消化な部分がそれだけ明瞭になって、もっと勉強しようという意欲がわいてくるから。

ヤ　準備ができていると、対立した意見が出てきた場合でも、これをよりたやすく論破できるから。

マ　準備ができていると、論争がどれほど激していても、その行く末をより的確に予測できるから。

問６　傍線Ｇ「テーゼとアンチテーゼとの闘争」とはどういうことか。三十字以上五十字以内で説明せよ。なお、句読点やカギ括弧などもそれぞれ一字と数える。ただし、「テーゼ」「命題」「アンチテーゼ」「反命題」「闘争」という語は使用しないこと。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第三講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者　末弘厳太郎＝すえひろ　いずたろう（一八八八～一九五一）山口県生まれ、東京帝国大学法学科卒。法学博士。
●ルドルフ・フォン・イェーリング（一八一八～一八九二）ドイツの法学者。主著『権利のための闘争』
●ベルンハルト・ヴィントシャイト（一八一七～一八九二）ドイツの法学者

語句

節操＝せっそう→自分のポリシーや信念を曲げないこと
固持＝こじ→自分の意見をかたく守って変えないこと。同音異義語の「固辞」は、役職に付きませんかなどと誘われても、かたく辞退すること
四囲＝しい→周り、四方八方
直截＝ちょくせつ→ためらわないこと。思い切りがよいこと
大悟＝だいご・たいご→迷いを取り去ること。仏教的には悟りを得ること。「大悟徹底」という四字熟語もあり、完全な悟りを得て、もはや迷いや迷妄がいっさいないこと
弁証法＝べんしょうほう→ディアレクティーク（ドイツ語）。意見の対立や対話を通してより高い意見を出す思考法。対話法。ダイアローグ（対話）による思考の発展方法。したがって、物別れ、ケンカ別れではなく、また単なる歩み寄りとしての妥協（だきょう）でもなく、混ぜ合わせの折衷（せっちゅう）案でもありません。むしろ、もともとの各意見以上の総合的な見解を生み出すこと。言い換えれば、正しいと思って提示した意見（テーゼ）も神様ではない、人間の発想した意見ゆえに、なんらかの欠陥があり、反論＝アンチテーゼを呼びます。その討論からよりよい総合意見（ジンテーゼ）

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

を生み出す知的な過程。形式的にテーゼは「正」、アンチテーゼは「反」、ジンテーゼは「合」と記号的に表現されることがあります

テーゼ↓提言・意見・主張・措定（そてい）・定立（ていりつ）・命題（めいだい）。「正」

アンチ・テーゼ↓反対意見。ある主張（定立・提言）に対し、それを否定する主張。反定立・反命題。「反」

ジン・テーゼ↓高められた総合意見・総合命題。「合」

止揚＝しよう↓アウフヘーベン（aufheben ドイツ語）より高い次元へ引き上げて統合すること。テーゼとアンチテーゼとの火花を散らすような対立や争点や違いを、なかったこととして解消するのではなく、対立を保ちながら、より高い次元へ引き上げて統合すること。総合命題（ジンテーゼ）へと対立を引き上げること。「auf」は英語の「upward」に相当し、「上の方へ」という方向性を示す言葉。「heben」は英語の「hold」に相当し、「つかむ・保持する」を意味する。したがって「アウフヘーベン」は対立や対話を保持しつつ、高次元へと引き上げるダイナミックな力や思考力を意味する

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第三講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

（ア）学者の節ソウを問う　①相　②総　③僧　④奏　⑤操

（イ）自説を無理にコ持する　①呼　②故　③固　④誇　⑤古

（ウ）四イを見て時流を追う　①囲　②意　③位　④居　⑤異

（エ）研究の先ク者となる　①句　②駆　③供　④功　⑤苦

（オ）学界の権イを蔑視する　①医　②偉　③畏　④威　⑤遺

（カ）互いにジン営を交換する　①人　②仁　③陣　④臣　⑤迅

（キ）対話から総合メイ題を導く　①明　②銘　③名　④命　⑤迷

（ク）大学での講ギを準備する　①議　②義　③儀　④犠　⑤戯

（ケ）闘争をコク服していく　①克　②穀　③刻　④告　⑤国

（コ）原コウ用紙に書きためる　①硬　②校　③高　④行　⑤稿

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第三講　法学部　学問論・弁証法

《本文の対比構造》

主役＝筆者の見解

真に学者らしい学者
全生涯を通じて大きな思想的転回をする
例　イェーリング（概念法学→自由法学）
　　ヴィントシャイト（自由法学→概念法学）

主な対比

敵役

- **学者の変説改論を無節操と非難する一般論**
- **なまじ自説を固持するために、自らも無理とは知りつつ無理を押し通そうとする学者**
- **根本に確固たる信念を持たずに、四囲を見まわして絶えず時流を追うような学者らしからざる学者**

小さな対比

脇役

小さな波

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

《解説》

問１《傍線部言い換え・抜き出し》

傍線部分と同じ趣旨の言葉を本文中から抜き出させる（ただし選択肢付き）このタイプの問題は、学部を問わずよく出題される早稲田大現代文の特徴です。選択肢選びの大きな基準は〝具体例は、一段、落ちる〟ということです。傍線部はまとまったメインメッセージ、最大キーワードであることが多く、その「最も適当な」言い換えを選ぶ以上、具体例は選ばないということが選定基準です。

イ「先駆者」、ロ「大悟に徹底（迷いを捨てること）」、ハ「交互的転回」は、イェーリングとヴィントシャイトの具体例中に出てくるものです。正解にはなりません。とくに「交互的転回」は、二人がたまたま、人生の前半と後半で立場が入れ替わったこと（概念法学と自由法学の交換）を表現したものです。ニの「微妙な波動」は、対比混乱の誤りです。変化・波・動揺は「大きな波」の方がよいのです。正解は、最終段落のホ「相互的批判」です。これは「テーゼとアンチテーゼとの闘争」、弁証法による「学者の進歩」を表現したものです。

問２《傍線部説明・選択肢》

筆者が言うところの「真に学者らしい学者」の具体例がイェーリングです。その「朗らかな態度」とはどんなものか。具体例に入る直前に（第一段落の終盤のところで）、「偉大な学者の全生涯を通じて行われた思想的転回の跡をたずねて、そこに一貫した合理性を見出すこと」とあります。真面目に学問に打ち込んでいるからこそ、自説の誤りにも気付けるし、それを乗り越えて成長していく。誠実な学者の長い人生ではそういうことは当然のように生じるということでしょう。逆に「なまじ自説を固持するために、自らも無理とは知りつつ無理を押し通そうとする学者」を批判しています。

正解は、ヲです。「学説を転回したのは、学者の全生涯における発展として自然」がよいです。ルの「態度は、正々堂々としていたから」では、マンマです。コソコソせず、背筋ピーンだったから⁉　これじゃ物理的スリカエの誤りです。学者としての知的成長、発展の必然性という内容に触れないとね。ワとカは同種の誤りです。それぞれ「概念法学から自由法学に変説したのは、学問上の論争の当然の帰結」「概念法学を捨てて自由法学へ転向したのは、法学の発展として合理的」とありますが、「自由

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

法学」の方が優れているからそっち側に行きつくのは当然としている点が誤りです。というのも、本文によれば「自由法学」と「概念法学」はどっちも重要なものなのです。「一体、法学における概念法学的傾向と自由法学的傾向とは、それ自身正反対なものであるにもかかわらず、そのいずれもが法学にとって欠くべからざる要素」と第三段落にありますよ。したがって、記述に反する誤りとも言えますし、部分的指摘の誤りとも言えます。こうして同種の間違いが選択肢のにぎわいとして出てくるということも知っておきましょう。解答時間の短縮につながります。ヨは、笑えます。「先輩学者に率直に旧説の誤りを告白して学説を転化したのは、好感がもてる」、つまり、先輩に対して素直でいいヤツって、昔の体育会系かよ！（法学系だよ！）これは不当な矮小化です。こういう楽しい間違いに気付けるようになると現代文の受験勉強もつらくはないかも。

問３《傍線部説明・選択肢》

問２とも問４とも関連しますが、知的な発展として「真面目」な学者は学説を変えることがある。いや、むしろ必然的に学説を自ら問い直し、論争・闘争しながら（他者との対話や自己内の対話）、大きく波打つように進歩していく。一般的に考えられるような進歩の仕方ではなくジグザグ進行していくのです。「大きな波」「波長」「動揺対立」という言葉が本文に見られます。したがって、ツの「発展は、単純に積み上げられることによってではなく、論争に由来する曲折を経て実現」がよいです。正解です。

タはどうか。「陣営を交換し」がいけません。イェーリングとヴィントシャイトはたまたま、概念法学から自由法学へ、また自由法学から概念法学へと「陣営を交換」しました。これはおもしろい偶然的具体例であって、すべての「真面目」な法学者がこうなるわけではありませんね。具体例は、一段、落ちる、を適用します。レとソは同種の間違いです。それぞれ「常に現実における実践を導入し」「実践の中で否応なしに変化する」は、「自由法学」の立場（現実に合わせて自由に、法解釈を柔軟に適応する立場）だけを語るものです。つまり、部分的指摘の誤りです。また、自由法学と概念法学の両方が「法学にとって欠くべからざる要素」という記述に反する誤りとも言えます。ネの「探求は概念法学的傾向と自由法学的傾向のどちらかに決着する」はどうでしょうか。どちらも重要なのであって、「どちらか」ではありませんぞ。これも部分的指摘の誤りおよび記述に反する誤りとなります。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問４《空欄補充・選択肢》

「一体、人間の思想的進歩は、決して［D］的に行われるものではない」とありますから、Dは敵役、一般的な進歩のイメージが入ります。一方「闘争のあらわれとしての［E］」は筆者側の見解です。「波」「波長」「動揺対立」の方です。あらためてDはその反対ですから、ムの「直線」とヰの「一方」が生き残ります。他はこの時点ですべて×。正しい対比喪失の誤りです。では、Eの部分はムの「動揺」か、ヰの「交換」かで考えます。「交換」は、あの二人の「交互的転回」のことです。本文中で「交換」はそれでしか出てきません。つまり、具体例にすぎません。ここでも具体例は、一段、落ちる、を適用します。ムが正解。

問５《傍線部説明・選択肢》

筆者は「テーゼとアンチテーゼとの闘争」がうまく進むために「準備」することをすすめています。「心の中だけで」「言わずともまた書かずとも」自己内対話、「自己闘争」を始められる人もいるでしょうが、書いた方がよい。つまり、「現在思っていることを言葉なり文章なりに体現して、それを完全なる外物に固定した上で、それをテーゼとしてただちにそれと心中のアンチテーゼとを闘争せしめたほうが、より容易に進歩を遂げ得るのではなかろうか」と語っています。

したがって、ノの「考えていることが言葉あるいは文章として外在化され、対象化されやすくなる」が正解です。オは「聴衆によく理解され」が記述に反する誤りです。自己理解の深まり、自己内対話ですよ。また「質問や反論がそれだけたくさん出て」も誤り。数の問題じゃありません。単発の反論か複数の反論かは比べてないよ。正しい対比喪失の誤りです。クはどうか。「自分の主張の中の未消化な部分」が×。これは自分の未熟部分、勉強不足部分です。そうでなく、十分に勉強し用意したからこそ、まったく正反対の意見が出てくると言っているのですよ。したがって〝勉強不足・未消化⟷もっと勉強〟は正しい対比喪失の誤りです。ヤは「論破」がイケマセン！　論争、闘争、対話から意見を発展・進歩させることが大事で、相手をやっつけて自己の正当性を主張するのではありません。記述に反する誤りです。マは「論争〜その行く末をより的確に予測できる」が×です。予言能力の話ではありませんぞ。論争そのものを進めて行く能力の話です。記述に反する誤りです。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問6《傍線部説明・記述》

「テーゼとアンチテーゼとの闘争」の言い換え説明です。弁証法のことです。動画講義と問題編テキストの語句解説からこのキーワードの理解を深めてください。一方で、もし弁証法という用語を知らなくても、設問条件にしたがって、「テーゼ」「命題」「アンチテーゼ」「反命題」「闘争」という語は使用せず、つまり本文の別の言葉で言い換えていけば答案は作成できます。得点になるポイント箇所その1は「テーゼ・命題」の言い換えで「己自らの意見（考え）」「自分の意見（考え）」「ひとつの意見（考え）」などの表現です。ほぼ同趣旨なら○です。第二ポイントは「アンチテーゼ・反命題」の言い換えです。「反論」「反対意見」「反対物」などでOKです。第三ポイントが「闘争」の言い換えで、「論争」「対立」「対話」「会話」「対決」「矛盾」などでOKです。さらに第四ポイントが「進歩」「発展」などの表現です。本文にはありませんが、知識を生かして、「止揚する」「揚棄する」「アウフヘーベンする」としても○です。

弁証法については、『高3トップ&ハイレベル現代文』第十三講でも特集しています。ぜひこちらも参照してください。弁証法を知らずに大学という高等教育機関へ進学するなんてことはあってはならないことです（と私は思っています）。予備校の授業でも一年間の中でかならず複数回触れるトピックです。

模範解答

問1＝ホ　問2＝ヲ　問3＝ツ　問4＝ム　問5＝ノ

問6　己自らの考えを明瞭にし、己と対立する考えとの論争を経て、思考を発展させること。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　解答　第三講

（ア）⑤　（イ）③　（ウ）①　（エ）②　（オ）④
（カ）③　（キ）④　（ク）②　（ケ）①　（コ）⑤

解答漢字一覧

（ア）節操　（イ）固持　（ウ）四囲　（エ）先駆者　（オ）権威
（カ）陣営　（キ）命題　（ク）講義　（ケ）克服　（コ）原稿

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。